
調査速報

道西日本海(檜山海域)スケトウダラ資源調査結果

2014年 12月 19日

北海道立総合研究機構 函館水産試験場 (0138-83-2893)

○2014年12月9～16日に調査船金星丸を用いてスケトウダラ資源調査を実施したので、結果をお知らせします。なお、今回は荒天のため図1に示す檜山沿岸域で計量魚探による魚群分布調査と海洋環境調査のみを実施し、着底トロールによる漁獲調査は実施しませんでした。調査速報は下記の函館水試ホームページからもご覧になれます。

<http://www.fishexp.hro.or.jp/cont/hakodate/>

- スケトウダラと思われる魚群は、熊石沖から乙部沖の沿岸側に多く分布し、江差沖や上ノ国沖では少なかった。
- 魚群は概ね水深 200～500mに分布し、分布の中心は水深 250～350m であった。また、例年スケトウダラが多く分布する水深 250m 以深の水温は 2.2℃以下で、平年並みであった。
- 檜山海域沿岸部における魚群反応量は、前年同期を約 1 割下回り、引き続き低水準。

● スケトウダラ魚群の分布状況

・ 水平分布(図1)

スケトウダラと思われる魚群の多くは熊石沖から乙部沖の海域に分布しており、分布の中心は沿岸側でした。一方、江差沖ではほとんど魚群が見られず、2013年の同調査(図1右図)ではまとまった魚群が見られた上ノ国沖でもほとんど分布していませんでした。

以上のように、今年は調査海域の北側に偏って魚群が分布していました。

・ 鉛直分布(図3)

スケトウダラと思われる魚群の分布は、概ね水深200～500mに見られ、分布の中心は水深250～350mでした。これは2013年とほぼ同様の結果でした。

● スケトウダラ延縄漁場周辺の魚群反応量(図2)

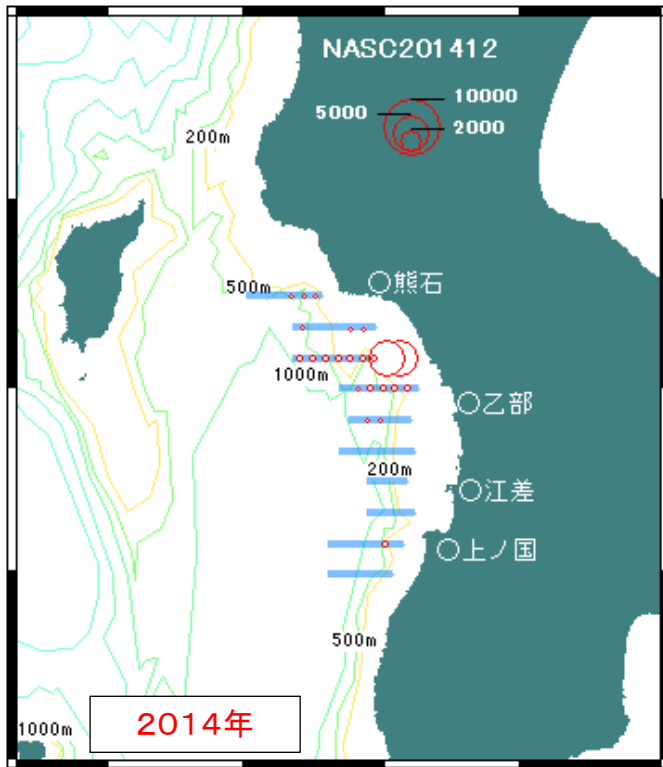
2014年の檜山海域沿岸部(図1)における魚群反応量は、2013年を約1割下回りました。

当海域の魚群反応量は、調査が始まった2002年から2008年まで概ね減少傾向で推移し、2010年以降は極めて低い水準のまま横ばい傾向となっています。

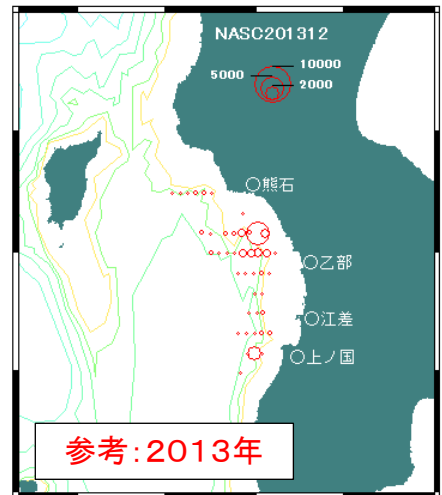
● 水温環境(図4)

スケトウダラ延縄漁場周辺の乙部沖、江差沖、上ノ国南沖で水温の観測を行いました。各調査点とも表層付近は平年並みの水温(乙部と江差:12℃前後、上ノ国南:13℃前後)でしたが、江差の100～250mは平年より低く、上ノ国の70～170mは平年より高めでした。また、例年スケトウダラが多く分布する水深250m以深の水温は2.2℃以下で、概ね平年並みでした。

42° 30' N



41° 30' N



139° 20' E

140° 30' E

図1 計量魚探調査による魚群反応量(NASC(m^2/nmi^2))の水平分布(2014年12月)
 ※魚群反応量(NASC):1マイル平方面積あたりの魚探反応の強さを表す。
 ○の大きさが魚群反応量の強さを示す。
 青線が計量魚探の調査ラインを示す。
 右図は2013年同調査における魚群反応量の水平分布図

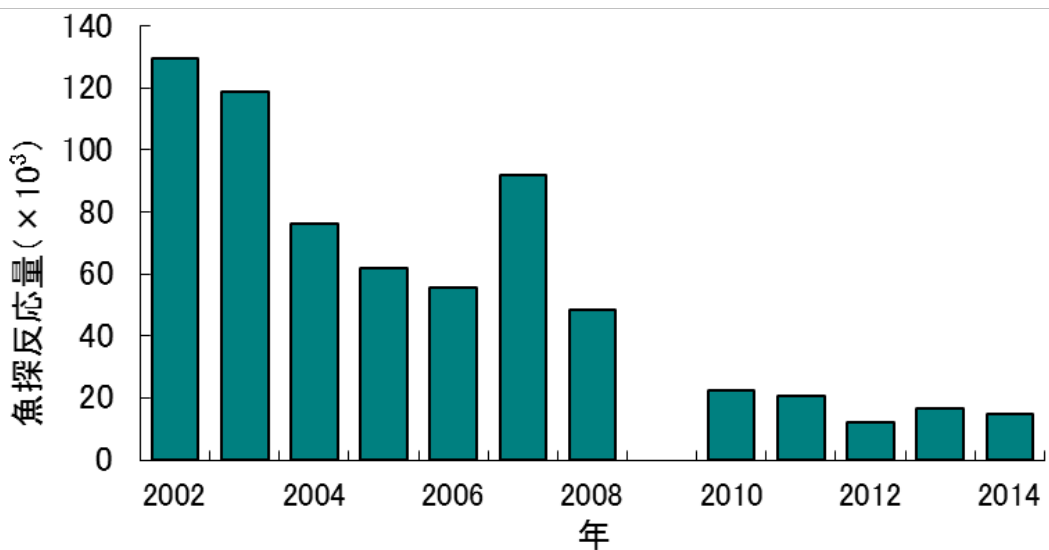


図2 檜山海域沿岸部(熊石沖~上ノ国沖)における魚群反応量の経年変化
 ※2009年は荒天で調査できず

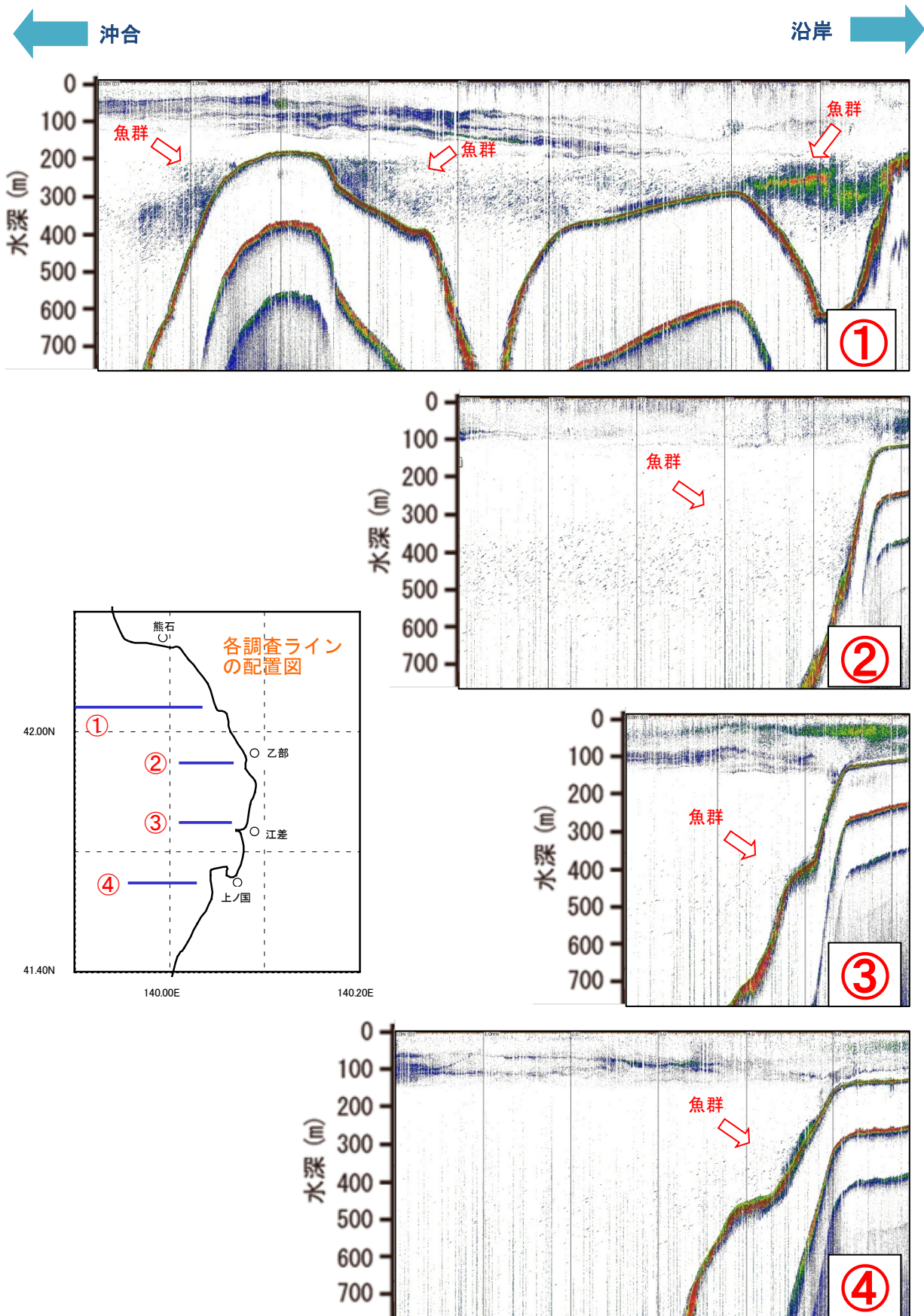


図3 各調査ラインにおける魚群の鉛直分布(夜間に調査を実施)

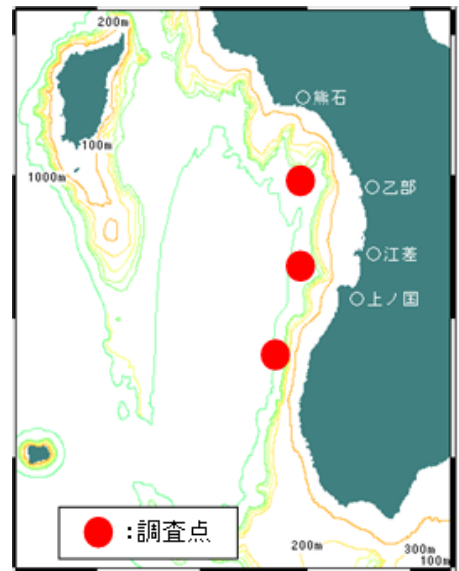
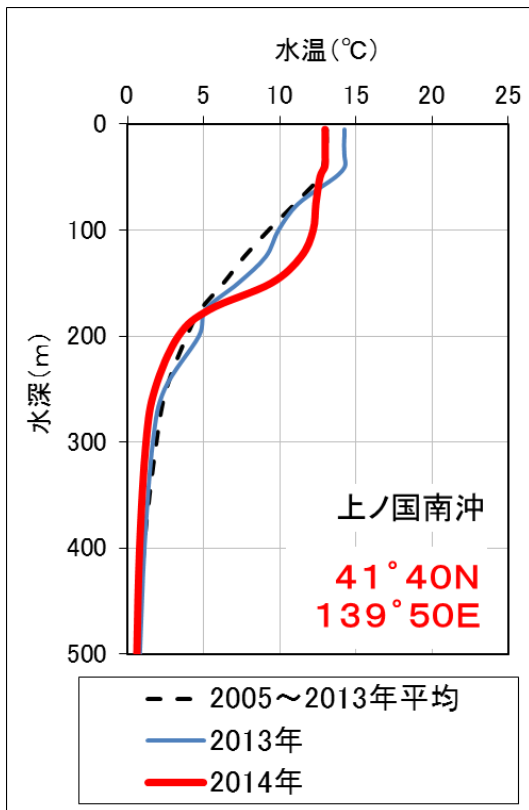
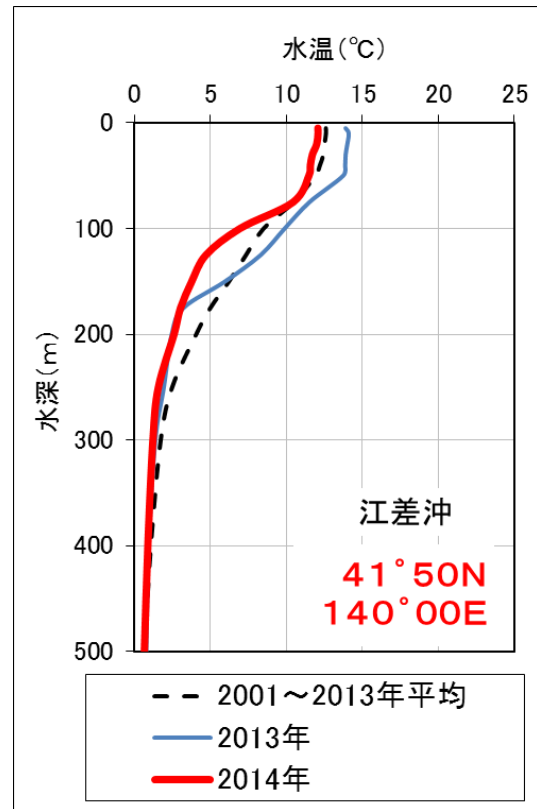
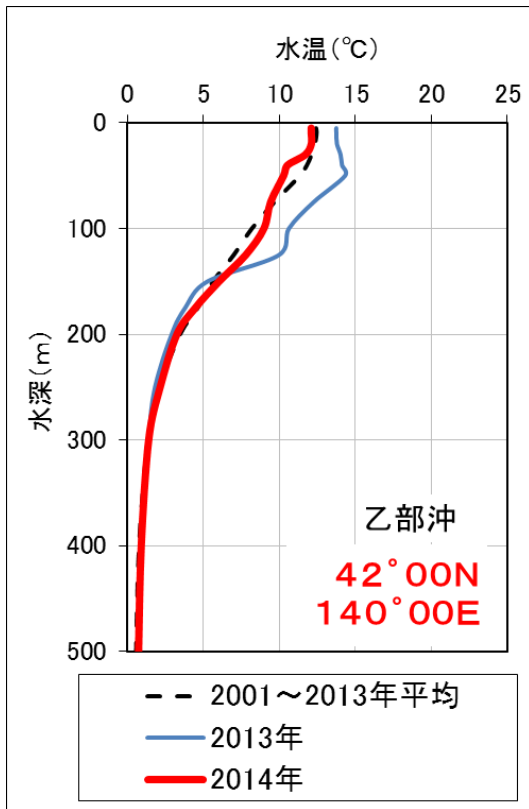


図4 乙部沖，江差沖，上ノ国南沖の鉛直水温分布と調査点位置